



謎の超笑力をもつ大魔王が、あなたに贈る不思議なムダ話

発行：トラベル・ミトラ・ジャパン (E-mail : daimao@travelmitra.jp)

ぼん子画

(570-0041) 大阪市北区天神橋 1-18-25 第3 マツイ・ビル 201 TEL : 06-6354-3011

お笑いエッセイのメール発信をご希望の方は、ご連絡下さい。(E-mail : daimao@travelmitra.jp)

「朱夏の女優黒木瞳のインド ⑦」

デリーでロケ本隊と合流した。ジャイプルでの撮影は何とか完了したようである。監督は上機嫌で、益々イメージを膨らませている。

「大魔王、明日デリー観光のシーンがある。その時ガイド役で出演してくれないか」

(OK! やりましょう。ところでセリフはどうなるのか)

その夜わが輩の眠りは遅かった。セリフをあれやこれやと考えていると眠れなくなった。

(わが輩もとうとう俳優デビューだ)

ところが、次の朝とんでもないことが起こった。

黒木が腹痛で苦しんでいるというのである。

某女優が小さい声で言ったのをわが輩は小耳にはさんだ。

「腹痛なんて、プロ意識が欠けているわよ」

「そういえば、ジャイプルで辛いカレーを食べていたな」

とスタッフが言った。

プロデューサーと監督が協議して、プロデューサーと付き人、それにわが輩が残ることになった。

(ええ! わが輩の出演はどうなるの)

監督は脚本家なのですぐに構想は変更され、わが輩の出演はボツになった。

(恨むよ。黒木瞳さん)

ロケ隊を見送ったわが輩は黒木の部屋に赴いた。

(これはこれで、とっても貴重な体験だ)

苦しむ黒木さんの前に付き人女性とプロデューサーが座っていた。

「医者を呼びましょうか」

とわが輩は黒木に訊いた。

「女医をお願いします」

(あたりまえだよ。男性なんかには黒木に触らせるものか)

わが輩はホテル専属の女医に往診を頼んだ。

「注射一本ですぐに治りますよ」

と、わが輩は慰めたが、黒木は大の注射嫌いですぐに断られた。

苦しむ黒木がわが輩の前に横たわっている。プロデューサーが背中を指圧し始めた。ならば彼女の脚は
どうなのか。無造作にわが輩の前どころがっている。誰が揉みほぐすのか。

(わが輩だよ)

わが腰を浮かして脚に触れようとした瞬間、思いがけないことが起こった。

付き人が、さっとわが輩と脚の間に割り込んできたのである。普段はスローテンポな付き人が、である。

「わたしが揉みます。黒木さん」

(謁見行為だ。なんでこんなときだけ俊敏なのだ)

全身から力が抜けて、へなへたと腰を下ろしたときの無力感を想像できようか。しばし彼らが揉みほぐすのを眺めるばかりであった。

(西洋の神は、わが輩を見放した)

しばらくしてドアをノックする音が聞こえた。女医がやってきたのである。白衣ではなくサリーを纏った上品な女医であった。

黒木は注射を好まない、薬で治して欲しい旨を伝えた。

「あなたは出て行きなさい」

女医はプロデューサーに指示した。どういうわけか、わが輩には冷たい指示がなかった。

(インドの神は、わが輩を見放さなかった)

触診のために黒木の胸を開こうとした、正にその瞬間に女医は黒木に訊いた。

「Is he your husband?」(お前さんのダンナかい?)

黒木と付き人は声を合わせて

「NO！」

(この部分だけ、なぜか英語が通じたのだ。無念)

「Go out」

女医の冷たい一言で、淋しくドアの外に出た。女医は“ダンナ”と勘違いしていたのである。

(10秒間のダンナ、それだけでも幸運だけど)

ドアの外にプロデューサーが立って待っていた。

ところが、付き人が出てきてわが輩だけ入れとのご命令があった。

(おゝ、再びインドの神の思召しだ)

わが輩が室内に入ると、完璧なガードが仕組まれていた。あの付き人がバスタオルを掲げて、わが輩と黒木の間を遮っているではないか。バスタオルを挟んで女医の質問→わが輩→黒木→わが輩→女医という会話構図になった。

わが輩と黒木の世界は隔絶したものになった。この時をもって黒木は遠くに存在になったのか。否、むしろわが輩と黒木は実に近い存在になったのである。

(読者諸氏よ。羨ましいだろう)

[お詫び]

このシリーズはまだまだ続きますが、少々飽きてきましたので、これを仮・最終章として、次の新ネタに移りたいと思います。ご容赦を。次号ご期待を！